

序

人はもちろん「パンのみにて生きる」ものではない。しかし「あなたは、あなたの食べたものでできている (You are what you eat)」というのもまた厳然たる事実であり、食事は健康や疾病と強く関連し、栄養摂取状況は病をもつ人の経過と予後に強い影響を与える。このように健康・疾病と食事・栄養には切っても切れない関係があるにもかかわらず、医師をはじめとする健康・医療プロフェッショナルの栄養に関する知識は驚くほど不十分である (もちろん管理栄養士を除く)。これは無理ならぬことで、各医療職の教育カリキュラムはすでに飽和状態で、十分な栄養学教育の時間を含める余裕がないからである。

特にわが国の医師教育における栄養学教育の不足は従前から指摘されてきたが、結果的に多くの医師、メディカルスタッフは現場に出てからその知識不足に気づき、卒前・卒後教育の必要性を痛感する。例えば、外科医と内科医、あるいは消化器科医と循環器科医は、それぞれの専門分野における食事・栄養療法や点滴の指示には慣れている。しかし、系統的な栄養教育を受けたわけではないので、内科疾患を有する患者の周術期や術後の合併症が長引いた場合、あるいは消化器疾患と循環器疾患が合併した場合などの食事・栄養オーダーが適切に出せないことがある。このことは、医学部と栄養学部の両方で教鞭をとる機会に恵まれた編者が、長年感じてきた問題であった。

本書は、そのような臨床現場で悩むあらゆる診療科の医師・メディカルスタッフのために、現場に必要な栄養学と食事・栄養療法の知識をできるだけ効率よく自学自習できるように編集されたものである。

現場経験の豊かな各分野のエキスパートの先生方に分担執筆をお願いし、「栄養学のための栄養学の教科書」ではなく、基礎栄養学分野も含め、あくまで臨床現場の疑問に応え、臨床現場に役立つテキストとして書き起こしていただいた。執筆された各先生の甚大な御努力のおかげでその意図はよく達成され、全編を読み通すことにより、現代の医療者に必要な各分野の食事・栄養の最新知識を獲得することができる。学生にとっては実践的な教科書として、研修中の医療者にとっては学生時代のカリキュラムの不足を補うものとなり、ベテラン医療者にとっては多岐にわたる食事・栄養に関する知識のアップデートに役立つはずである。

末筆ながら、この「すべての診療科で役立つ」というコンセプトを深く理解していただき、あらゆる面で辛抱強くサポートしていただいた羊土社の原田悠氏と関家麻奈未氏にはこの場を借りて深謝したい。本書により、現場医療者が栄養学の重要性和食事・栄養療法の効果を再認識し、得られた知識を日々の臨床に活かしていただければ幸甚である。

2018年10月

新潟大学大学院医歯学総合研究科血液・内分泌・代謝内科学分野
曾根博仁